

流点りゅうてんのように、一すじの帯おびとなって眠ねつてみえました。住すまいから少し山をのぼると、自分と同じ名前の西郷寺さいごうじという古いお寺があつて、故郷こきやうでなくなつた人々のことをなつかしく思い出させました。散歩のたびに、四郎にはいろいろな思い出がよみがえつてきました。

「いろいろなことがあつたな。」

痛む足をさすりながら、四郎は、考えこむ日が多くなりました。

『山嵐やまあらし』の技わざで柔術をたおし、講道館柔道の基礎きそをつくり、

——向こう通るは、西郷四郎——

と、歌にまでうたわれた四郎でしたが、嘉納治五郎かののりごろうのるすの間に、不意ふいに、講道館からその姿を消してしまつたのです。

「おれは、ただの柔道家で終わりたくなかつた。あのままでは、おれは何もできない人間として、かたまつてしまひそうだった。だから、何かしたかつ